

## 発展途上国との学術交流について

松浦泰次郎\*

Academic Interchange between Developing Countries and Japan  
Taijiro MATSUURA\*

発展途上国では、自力で社会的経済的諸問題を解決し、開発を進めるための人材養成が急務となっており、特にASEAN諸国では、わが国との学術交流を通じて、必要な研究者が育成されることを強く期待している。また、発展途上国においては、熱帯医学、熱帯農学等の分野に見られるように、日本あるいは先進国における社会経済条件あるいは自然環境の下では考えられない斬新な研究課題を発見することもできる。それから、広く国際連帯の前提となる文化の相互理解という観点からも、発展途上国との学術交流は相互にとって重要である。このため、文部省では、学術審議会の「発展途上国との学術交流の推進について」(昭和52年6月)の建議の趣旨に則り、昭和53年度から主として日本学術振興会をわが国の窓口機関とし、東南アジア諸国を当面の対象として、次のような事業を実施している。

### 1) 拠点大学方式による交流

この方式は、一定の研究領域を対象とした各交流事業ごとに、相手国およびわが国においてそれぞれ中心となる大学を定め、その大学を中核とした協力大学群を組織し、相互の群の間に緊密な協力機関を作り上げ、全国的に人材の活用を図り、組織的、継続的かつ有機的な交流を図ろうとするものである。交流の形態としては、研究者の受入れ、派遣、共同研究、セミナーの開催がある。現在、タイと微生物工学の分野(カセサート大学—大阪大学)で、フィリピンと農学の分野(フィリピン大学—東京農業大学)で、インドネシアと農学(ボゴール農科大学—東京農業大学)、理工学(インドネシア大学—東京工業大学)、医学(インドネシア大学—神戸大学)の各分野で学術交流事業を行っている。

これらの事業内容としては、微生物工学分野においては、新規醗酵生産の開発に関する研究、既存醗酵プロセスの改良に関する研究、農学分野においては、農地生態に関する研究、作物保護に関する研究、水田窒素固定に関する研究、根菜類(キャッサバ等)に関する研究、理工学分野においては、光電子工学に関する研究、医学分野においては、 Deng 出血熱に関する研究、慢性肝疾患に関する研究、などがある。なお、昭和56年度からは、未実施であったマレーシア、シンガポールとの間で拠点大学方式による交流の予備的交流を開始した。

### 2) 論文博士号取得希望者に対する援助

かつて日本に留学した方などで、日本の大学の博士号取得を希望している発展途上国の研究者に、その道を拓くため、わが国の論文博士号制度を活用することによる援助を行っている。援助方式としては、学位取得希望者をわが国へ招致して研究指導を行うものと、帰国後も研究を継続している研究者に対して、受入れ大学の指導教官を現地に派遣し研究指導を行うものがある。

### 3) 一般交流方式による交流

研究者個人レベルでの地道な学術交流も重要であり、この方式による交流も進められている。

### 4) 学術情報交換

わが国の主要な学・協会発行の欧文誌を発展途上国の大学等に寄贈する等の事業を行っている。

\*文部省学術国際局長  
Director General, Science and International Affairs Bureau,  
Ministry of Education, Science and Culture  
原稿受理 昭和56年10月2日